

DHARMA EYE



法眼

ご挨拶

瀧澤和夫

曹洞宗宗務庁・教化部長

『Dharma Eye』をご購読の皆様におかれましては、益々ご清祥の御事と拝察申し上げます。又、平素から格別のご愛顧をたまわり、改めて御礼申し上げます。

この度、2006年10月21日付けで河村松雄前教化部長（現・伝道部長）の後任を拝命いたしました。浅学非才の私にとっては、まことに身に余る光栄でございます。これまで、国際布教審議会委員、国際布教専門部会委員、SOTO禅インターナショナル顧問として、微力ながら宗門の国際布教に関わってきました。今回直接担当することとなり、諸問題解決に向け尽力する覚悟でございます。

さて、宗門の海外布教はハワイ・南アメリカの日系移民を対象として始められ、以後北アメリカ・ヨーロッパとその布教範囲を拡大してまいりました。開教以来100年が経過し、一仏両祖のみ教えは確実に世界の人々に浸透しており、布教教化の対象も多様化してまいりました。

この多様化とグローバル化に対応する為の1つの手段として、昨年11月より、英語版教化資料「Zen Friends」、ポルトガル語版教化資料「Caminho Zen」、スペイン語版教化資料「Zen Amigos」の3種類の冊子による定期刊行物を電子出版（WEBサイト）へと移行し、対応言語も前述の3ヶ国語に加え、フランス語・ドイツ語・イタリア語の3ヶ国語を加えた6ヶ国語で配信しております。

しかしこの多言語WEBサイトの内容は、今のところ従来の曹洞宗公式ホームページである「曹洞禅ネット」をほぼ踏襲したものを翻訳した形となっております。今後は当該多言語WEBサイト独自のコンテンツを構築し、より充実させる事で宗門の海外布教に十分に活用できうるものに発展させていく事を目標としております。同時にこの事を皮切りとし、国際的な潮流に乗り遅れる事無く、世界の動向に対応すべく、取り組んでいく所存でありますので、ご意見をいただけたら有り難いと存じます。

現今、宗門全体が直面する諸課題は多岐多様に亘り、大きな転換期を迎えております。そしていずれも早急解決と対応に迫られております。

宗務庁では、かねてより海外僧侶の規程統一化の問題を検討しております。この問題は国際課のみではなく、関連する部署との緊密なる関係を構築し、情報交換しながら、できるだけ早い機会の宗制化を目指し、残された課題、つまり海外における宗門認可の専門僧堂設置が具体化されることを目標として検討してまいります。併せて、この事が成就された時には、宗門の国際布教は大きく次の段階へ発展していくと思っております。

次にヨーロッパ国際布教総監部は、再開より5年の月日が経ち、その間、管轄内での会議並びに研修会を持ち回り開催にするなど、順調に管轄内の国際布教師・伝道教師との関係を深めてまいりました。

そこで、当初開教総監部が設置されていたフランス共和国パリ市への移転を進めるべく調査を開始し、管内関係者からも賛同を得ましたので、移転作業を推し進めました。その後、フランス国非営利法人の定款が認められることができ、現地非営利法人登記が完了致しましたので、昨年12月よりヨーロッパ国際布教総監部はパリに移転し、実務を開始しております。

また本年はヨーロッパ国際布教40周年記念行事が6月に計画されております。綿密な打合せの上、十全の準備で臨む次第ですが、皆様のお力添えは欠かす事ができません。何卒、宜しくお願い致します。

もとより微力ではございますが、任期中は国内外における宗門の布教教化に対しての責務を全うする所存ですので、宜しくお願い申し上げます。

40年を、起点として

今村源宗

ヨーロッパ国際布教総監

弟子丸泰仙師が、喧噪のパリの裏町で、まるで菩提達磨が黙々と壁に向かって坐ったように、超然と坐禅を始めてから40年の歳月が流れました。一人の禅僧が示した、人間の根元的真理と安定をもたらす仏教の生きた活動である「禅」は、言語、民族、地域、老弱、男女の差を超越して、今日ヨーロッパ各地で多くの人人に、共感とともに受用され「文化」を形成していると言えるでしょう。本来宗教とはそういった、自由で均等な「普遍性」を持っているべきものなのですが、宗教的尊厳がある種の重圧となって逆作用することが往々にしてあるものです。

「禅」の実際の活動体である「坐禅」の実践が普及して40年を迎える今年に、改めて大きな視野のもとで普遍的宗教としての仏教の本質と多くの側面を話し合い、未来に受け継ぎ向上させる新しい一歩にしてゆきたいと思うのです。

そのことを踏まえ、2007年6月8日(金)から10日(日)まで、3日間に亘りフランス国禅道尼苑で以下の40周年記念事業を行います。

- 1, 弟子丸泰仙初代開教総監(現国際布教総監)追悼法要
- 2, 弟子丸老師について・・・回想と思い出
- 3, 40周年記念シンポジウム「仏教の普遍性について」
- 4, 40周年慶讃歎仏会
- 5, ヨーロッパ国際布教功労者追悼法要

ヨーロッパ国際布教のために尽力された方々を偲ぶだけでなく、現在活動する宗侶と信徒の皆さん、そして将来に正しく坐禅の教えと実践を引き継ぐ人々のためにも、2007年が輝かしい充実した年になるよう、お互いに努力してゆきたいと思えます。

まごころに生きる

～百千万発の同事行～

2006年9月7日 7:30 pm.

グリーンガルチファーム

増田友厚特派布教師

長野県・大林寺住職

皆様こんばんは。一日のお仕事のあと、ご参集いただきました。あたりがすっかり暗くなってきました。戸外の淡い月明かりの中を2頭の大きな鹿がゆうゆうと歩いていました。きっとお母さんと子どもさんの鹿でしょう。

「いらっしゃーい、いらっしゃーい」と呼びましたが、美味しい物をもっていなかったせいか(笑)、近づいてきませんでした。このような自然一杯の中にご案内をいただいて、ホッとしております。

さて、あたりが薄暗くなってくると、みなさんには時折心寂しくなることはありませんか？

日本の有名な文学者に吉川英治という方がいます。『宮本武蔵』『新・平家物語』などの作品を残しています。その吉川英治さんが語っています。ご自分が50歳を過ぎて心寂しくなるときに、手首を出して脈を探そうです。脈はありますか？無い方いますか？無い方は大変です(笑)。脈を探すと、トクン・トクン・トクンと脈の音が響いてきます。そして、考えます。この脈の音は30年前も打っていたな。40年前も打っていたな。その40年前を振り返ってみると、私の周りには母がいて父がいて兄弟たちがいて、まわりの友達がいて、たくさんの人たちと過ごしていたな。そして、母が作ってくれた美味しいご馳走をみんなで囲んだこと、兄弟とかけ回ったこと・・・を思い出すのです。その時、そうだ、だから私は一人ではないのだ、と思うのです。脈の音を通してたくさんの人たちとつながっていることに改めて気付くのです。もっともっと昔にさかのぼっていくと、母に抱かれておしめを取り替えてもらって、オッパイをのませてもらっていたであろう自分の姿があるのです。たくさんの人たちと、たくさんのおしめと、たくさんのおッパイと、たくさんのおしめと、みんなひとつづきなのだと強く思うのです。そして、更にさかのぼっていくと、母のおなかの中にいた日々があり、その母もずっとさかのぼるとまたその母の中にいて、またその母もさかのぼるとまたその母の中にいたのです。

私たちはたくさんのおしめのちとたくさんのおしめのちと全部繋がってひと続きのいのちなのだと思えるのです。繋がっているひとつひとつのいのちを、恋しく懐かしく有難く抱きしめたいほど大切にしたいと思えます。

すべてのものがかわり合い、支え合って存在することを「縁起」といいます。しかし、同時にそれらは、絶えず変化し移り変わってゆきます。これが「無常」です。

もう一人、ある私の友人は脈の音を確かめながら私にこう言いました。「この脈の音は我が命を削る鉦の音だ。」皆さんはあと何年くらい生きる予定ですか？予定はありませんか？我が命の終わりは明日かもしれないし、30年後かもしれないのです。いずれにしても命の長さが限られているということは確かです。すると、当然、打つ脈の音の数も限られているということです。その限られた脈を、トクン・トクン・トクンと今も私は打っています。ひとつ打つごとに、私の脈の数は残り少なくなっていく。だから一つの「トクン」は命を削る鉦の音なのです。道元禪師さまは、私の命がそのようなにはかないものだと強く承知を下さいと示されました。

「縁起」、「無常」、この言葉に象徴されるありようを法といます。その法についてお釈迦さまは簡単に気付かれたのではありません。ご承知のようにお釈迦さまは2500年前にカピラ国の王子として生まれました。お悟りをひらかれてから弟子の者たちに語っています。私の父の城の庭の池には、青や赤や黄色の蓮の花が咲き誇っていた。また、私の部屋には、いつも香り豊かな香が置かれていました。私の着ているものはいつもカーシー産のものであった。そのように恵まれた日々の中にお釈迦さまはいらっしゃいました。ところが避けることのできない病、老い、死を目の前にしながら、そのことから逃げよう逃げようとしている情けない自分に気付くのです。

お釈迦さまはそのような苦しみやつらさの中を生き抜く中でご修行を重ね、生きる意味を見出されたのです。もし私たちがぼんやりしていると、お釈迦さまの教えには到底到達できないのです。

ところで、その教えが中国に伝えられ、正しい仏法を求め中国でご修行中の道元禪師さまによって日本へ伝えられ、永平寺が開かれ、四代目の瑩山禪師さまが總持寺を開かれました。永平寺と總持寺の禪師さまが代わる代わる曹洞宗管長という曹洞宗の代表のお役をお勤めになられます。今は總持寺の禪師様、大道晃仙禪師様がお勤めです。

私が皆さんにお会いするにあたって禪師様より、メッセージを預かって参りました。

管長告諭

私の一生涯の願いは、あらゆる人と人とが仲良く共に助け合い、支え合うような和合の社会を築いていきたいとの一願につきます。

世界は、利害を巡る駆け引きの中で、民族や宗教を対立の軸として、悲惨なテロや戦闘に血を流しています。

我が国においても、凶悪な事件や、自ら命を絶つ人が後を絶たず、仏弟子として力至らぬことに胸が痛みます。

奪い合い傷つけあう社会は、遠からず滅亡に向かいます。

分け合い助け合う社会こそ、未来に希望を見出せるのです。

曹洞宗は、時代と社会を直視して、本年度も信仰生活の実践を「同事行」と定めます。私たちは、共に限りある命を、一つの地球に生き、一つの大地に戻る身ではありませんか。人も自然も、全ては切り得ぬ関係の上に成り立っているのです。大切なことは、その関係の持ち方であります。

「我見・我執」の垣を越え、助け合い支え合う仏の道を歩みましょう。それが、『修証義』に示された「同事」です。

偏見や差別は、正しい人間関係をもたらしません。理解と反省によって、微笑み合える関係を築きましょう。 人権

奪い合い傷つけ合えば、怨みの連鎖となります。分け合い支え合う喜びを知り、幸せを実現いたしましょう。 平和

歯止めなき自然破壊は滅亡への道です。すべての命を慈しむとき、共生の輝きに包まれるのです。 環境

皆様と共に、み仏の教えにかなった道を歩んで参りたいと切に願います。

南無釈迦牟尼仏

大道禪師様、曹洞宗管長様のおことばは、一年間曹洞宗が力を入れてすすめていきたい強い願い、即ち誓願です。その中で、大きなポイントは「同事行」。大事な一文字は特に「行」、「行い」です。行、行いです。心の中で思っていることも大事です。でも、それを行いにかえる、行にする、これが大事なメッセージのポイントです。でも、私たちはなかなか同事行ができないのです。なぜでしょうか。私たちの心の中に、うまいことして他人より儲けたい、少しいいことをしてたくさん誉めてもらいたい。少し有名になっていい気持ちになっていたい。そういうところがあるからです。みなさんに有りはしないですか？他のひとのことでなくそれぞれ自分自身のことなのです。同事行とはその思い通りにしたいという心から抜け出せないといけないのです。

実は、その行いを形にして実践しているのが坐禅です。坐禅の時に頭の中に色々浮かびます。たいがい大したことは浮かんでこないのです。そのことの一つ一つにかかわらないで、坐禅中そっと横に押し流し押し流して、無限にこの働きを重ねるときおのずからそこには“俺の思いどおりにしたいという考え、即ち執着をはなれた自己存在”という“行い”があります。瑩山禪師様の説かれる“覚触”とはこのことです。ですから、坐禅の時の私の存在の有り様は同事行の展開そのものとイコールなのです。この時はじめにお話したように、たくさん命と繋がっていることが実感できるのです。

そして、ひとつ、ひとつ、ひとつ、ひとつの、物や人の存在が、私にとって大切な存在だと素直に気付けるのです。そのことを道元禪師の先生である如浄さまが次のように示されております。

「いわゆる仏祖の坐禅とは、初発心より一切の諸仏の法を集めんことを願うがゆえに、坐禅の中において衆生を忘れず、衆生を捨てず、ないし昆虫にも常に自念をたまい、誓って済度せんことを願い、あらゆる功德を一切に廻向すなり。このゆえに、仏祖は常に欲界にありて坐禅弁道す。」

宝慶記

昆虫を大事にしろという命令ではないのです。自分の周りにあるひとつひとつの物やいのちを大切にしたいと思える心が溢れ出て、昆虫にまでやさしいところが届くのです。その思いは、昆虫だけにかぎらない、人や物やいろいろなものにまで広がっていきます。そのことを道元禪師様が具体的にしめされたものの一つが典座教訓です。典座はご承知のように食べるものを用意したり作ったりするお仕事です。有名な話があります。

道元禪師様が中国の天童山というお寺で修行中のことでした。夏の暑い日、廊下を歩いていきますと一人の老僧が海草を干していました。老僧は杖をついて、眉は鶴のように真っ白であった。腰は弓のように曲がっておったと書かれております。道元禪師様は汗をポタポタ流しているお姿に驚くのです。そして、そのお方に尋ねました。

「お見受けするところあなたは台所のお仕事を担当しているお方です。もっと若い方々がたくさんいるのだから、代わってもらったらいかがですか？」

この老僧は腰を伸ばして、

「外国からきた若い坊さんよ、あなたはまだわかっておらんう。」

そして言われた一言。

「誰かに代わってもらえばいいと言うけれども、誰かに代わってもらっても、わしの仕事ではなくなるのだよ。私のやるべきことは私がやるのです、私の修行は私がやるのです。」

道元禪師はまだよくわかりませんでした、そして重ねて問いました。

「それでも、こんなに太陽が照っている暑いときではなくて、夕方とか明日とか明後日があるではないですか。」

するとご老僧が道元禪師にまた答えられました。

「今というときは今しかないんですよ。今が充実していなくて何を人生というのですか。」

「^{にこん}而今、今が大事ですよ。」

確かにそうです。たとえば私で言うならば、昨日までの人生が仮に少し気の利いたことをしていたとしても、それは過ぎ去った昔の思い出話です。明日、明後日はまだ来ていない不確かな時です。私にとって確かなのは、「今」「この時」をおいて無いのです。私が今を大事に真剣に皆さんと向かい合っているとすれば、私のすべての人生は中身濃い、意味あるものと言えるでしょう。皆さんの「今」「この時」はいかがでしょうか。

さて、典座教訓の一部を皆さんと一緒にみてみましょう。

「^{ぶつけ} 仏家に本より六知事あり、^{ろくちじ} 共に^{ぶっし} 仏子たり、同じく仏事をなす古に云うく、飯を蒸す鍋頭を自頭となし
いわゆる^{べいはい} 米菜等、^{たく} 打得し^{あわ} 了って、^{これ} 之を^{ごんせい} 護惜すること眼睛の如くせよ。水は是れ身命なりと知る
^{およ} 凡そ^{もつしき} 物色を^{ちようべん} 調弁するに、^{ほんげん} 凡眼を以て^{なか} 観ること^{なか} 莫れ、^{なか} 凡情を以て^{なか} 念うこと^{なか} 莫れ」

典座教訓

お釜、鍋、水、お米、それぞれを大事にしろと書かれております。特にお米や野菜は私の眼睛のごとく大事にしろと書かれています。単なる目ではないのです。日本の言葉で眼睛というときは、私自身の心を象徴してまなこ眼というのです。ですから、米や野菜を大事にするということは、私の心、即ち私の命と同じように大事にしろということなのです。さて伺いましょう。皆さんは、お米一粒一粒、野菜の一切れ一切れ、大事になさっていますか？私のことでは無いのです。皆さん、お一人お一人のことなのです。そしてに凡眼という言葉がありました。ぼんやりした、眠っている眼のことです。凡眼と対極の眼は「仏の眼」です。それは、お釈迦さまの教え、道元禪

師様の教え、瑩山禅師様の教え、宝慶記の教え、典座教訓の教え、そのものです。

ところで、これ(しおれたほうれん草、一葉を提示して)を教材として凡眼と「仏の眼」について一緒に考えてみましょう。

お客さんがたくさん来ました。皆さんが料理の担当、典座だったとします。これが用意されました。どう思いますか？普通の人、凡眼の人は多分「こんなくたびれた野菜、どうやってお料理を作れというの？」そう思うでしょう。ところが、実はまだあるのです。(束ねられたたくさんのほうれん草を提示して)こんなにたくさんあるのです。皆さんはどう思いましたか？「これはすばらしい、きっといい料理ができる」と思ったでしょう。これ(しおれた野菜)を見たときに大した料理ができないなと思い、これ(たくさんの野菜)を見たときに素晴らしい料理ができるという思い方は凡眼です。

仏の眼で見る見方は、この菜っ葉一枚であっても、どんなにしなびれてくたびれていても、ひとつの命です。大事な大事な命です。ですから、これを十分に活かして典座のお仕事をしたいのです。こちら(萎びていない、たくさんの野菜)が用意されても同じ思いで料理をするのです。

さて、典座教訓はお米、野菜、水についてのお示しだけではないのです。その見方を一人一人に向ける、他の物に向ける、これが肝心なところです。私たちは身体の弱い人もいます、強い人もいます、仕事のたくさんできる人もいます、少ししかできない人もいます。覚えるのが得意な方がいます、不得意な方もいます。みんなひとりひとりのいのちです。大切な大切な、ひとりひとりのいのちです。そして一人一人違うのです。皆充分ないのちのいとなみの中にありますからその差異は“証”でもあるでしょう。同じように大切ないのちとしてのソファです。大切な絨毯です。大切な壁です。そのように見えるのが“仏の眼”です。

「一いっしょうさい茎菜ねんを拵りしよじて丈六身いっしょうさいと作し、丈六身いっしょうさいを請りしよして一茎菜いっしょうさいと作す。仏事及び利生するものなり」

典座教訓

この一文は、菜っ葉一枚が生き生きとするように、「大事にしてくれてありがとう」と、菜っ葉さんがいえるように、生かし切ること、これが仏事、すなわち仏としての行いなのです、と説かれています。

もう一つ、同事行は「慈しむ心・行い」と置き換えることができます。この慈しむことについてお釈迦さまは、次のように

示されています。

「スッタニパータ 149

あたかも母が己が独り子を命を賭けても護るように、そのように一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の(慈しみの)心を起こすべし。」

慈しみの心は母の心だと。たとえば一人の子どもが転んだとします。血を流して痛い痛い泣いていると、その子の痛みが母自身の痛みです。その時、子どもの痛みと母の痛みはひとつのもので。もうひとつ、母さんの先輩がいるならば伺いたい。子どもが転んだときに、走って行って抱き起こす。その時に母は何か考えているかどうか？例えば今起こしたら、大きくなったらお小遣いをたくさんくれるかな？否。母は考えないのです。すなわち、母の子どもに対する思いは損得の計算がないということなのです。

ですから慈しみのところは、「人さんの悲しみが私の悲しみ」、そして「手助けするときに何の損得計算もない」ということです。

「スッタニパータ 151

立ちつつも、歩みつつも、座しつつも、臥しつつも、眠らないでいる限りは、この(慈しみの)心づかいをしっかりとたもて。この世では、この状態を崇高な境地と呼ぶ。」

歩いているときも、仕事をしているときも、起きているときはいつも「慈しみの心」、即ち「同事行」のころを忘れないでいたい、これがお釈迦さまの教えです。

道元禅師様は「いつもいつもいつも忘れないでいる」ということを“百千万発の発心”、と言われました。百千万発ですから、慈しみの心を、起こそう 1回、起こそう 2回、起こそう 3回、百千万発です。

ということは、忘れないでいつも、いつも、ずーっと、慈しみの心、同事行を重ねていくということです。

さて、最後です。たくさんのいのちに生かされている私たちが、出会ういのちひとつひとつに同事行を重ねてゆきましょう。しかも百千万の発心で続けてゆきましょうと話させていただきました。

長い時間のご清聴ありがとうございました。

2006年伝道教師研修所で垣間見たこと

ヤナサック泰寛

アメリカ・好人庵禅堂

可睡斎専門僧堂に向けて出発する時、私はこれからの30日間をどのように過ごすのか、五里霧中の状態でした。日程を全く受け取っていませんでしたので、私は予想することもなく、私は決められた日時にそこへ行くだけでした。あとは私が考えることではないと思いました。私がすべきことは、私に期待されることや求められることに、最善を尽くすことでした。

スーツケースを引きながらお寺の玄関に入った私は、伝道教師研修所のためにやって来たことを告げました。受付の僧侶が私の名前を聞き、名簿を確認し、別の僧侶が私を部屋まで案内してくれました。この時から、30日間の私の僧堂での生活が始まりました。

私が最も印象深かったのは、曹洞宗宗務庁が日本の僧堂で日本人の修行僧と共に学び修行する機会を私たちに与えることに力を尽くしてくれたことでした。彼らはスタッフとなる僧侶を交代で配置し、30日間という限りある時間内に私たちができるだけ多くのことを吸収できるように配慮してくれました。私たちはそれぞれの国で修行をしていますが、ここでは坐ること、読経すること、食事をする、勉強すること、修行僧と一緒に作務をすることなど、私たちの祖師が修行してきたのと同じようなことを経験しました。

彼らが私たちの滞在を意義あるものにするために、彼ら全員が生活の一部を提供してくれたことにとても感謝しています。

私は修行僧と共に働き、集団としての努力や目的を補い合い、決して自分自身のためにふるまっているのではないことが印象的で素晴らしかったです。そのような態度は勤行の所作の細部だけでなく、読経も含め、勤行の間にとてもよく現れていました。それは一人一人の声を聞くことが不可能だったことです。僧侶の数にかかわらず、私が聞いたのはすべてひとつの音で、読経はひとつの声で、強いけれどもやさしく、透明ではっきりしていました。

いくつかのお経は唱え方があまりにも早く、どんなに頑張ってもついていくことは不可能でした。私は何度も感銘を受けるだけでした。終わりの頃にはその早さについていけるようになりましたが、度々聞いているところ、経本を見ているところがずれていました。日本人修行僧のみごとな協調には感銘を受けました。

私たちはほとんど毎日3時間、法要の進退習儀を修行僧の手

助けや指導を受けながら行いました。彼らは各配役で戸惑っている私たちを、驚くほど親切で忍耐強く見てくれました。私たちが次第に慣れてくると、彼らと一緒に行動することが認められ、重要な配役を私たちが行うことになり、私たちが堂行、副堂、拳経をつとめ、殿鐘打ったりしました。修行僧がやっているのと同じように私たちが上手にいくとは思っていませんでしたが、私たちは何度も何度も繰り返し練習し、最善を尽くしました。

それぞれの配役で何をやるか知ることだけでなく、同じく重要であるのが、他の修行僧が法要を上品に行っていることを知ることでした。それは踊りと同じようなものであると、あるクラスの際には私はメモしてありました。仏陀と私たちが行っていたことには相違がなく、坐禅、法要、作務、何でも、私たちは仏教の本質と常にひとつでした。私たちの修行は何かを考えることではなく、何をやるにしても私たちの全身で行ずる事であると何回か気付くことができました。

茶道、華道、太極拳に参加する機会を与えられたことにより、私たちの生活の目的は、その場その時に最善をつくすことであり、それは坐禅と同じことであると自覚しました。

私たちはすべての色々な修行を上手にやろうと試み、上手にできたときも、上手いかなかったときも、大いに笑いました。私は自分自身に我慢すること、十分にできると信じて、私自身をコントロールすることをやめる、自然であることを繰り返していくことが必要であると気付きました。それは非常に難しく、とてもやりがいのあることです。

10日目の午後、奥村正博師が8講ある道元禅師弁道話の第1回目の講義をおこなわれました。奥村師の講義は学術的な深い理解と、心を奪うほどの経験に基づく知識が融合したものでした。外からの視点で、彼が言うことや話し合ったことすべては、内に秘めた情熱と道元禅師の言葉が生き生きと織り交ぜられていました。

19日目の朝、藤田一照師が瑩山禅師の坐禅用心記の8講ある講義を始め、藤田師の講義には、奥村師と全く違う空気が流れていました。彼の行動は快活で、とても親切に私たちの修行、特に坐禅の重要性について講義してくれました。藤田師に感謝したいことは、私たちが修行中、毎日の生活で実際に経験や直面しているようなことに、包み隠さずに論議してくれたことです。藤田師の講義スタイルは、私たち研修生が質問し参加するかたちで、私たちに広く受け入れてくれました。同じような問題でもがいている人への励みになり、大変貴重なものでした。

吉野真常可睡斎後堂老師は3日間の撰心中、毎日午後提唱され、わたしたちの命の即時性、今あることの重要性、すべての身体で坐禅をすることを説明されました。彼の存在、私たち

と一緒にいること、私たちと一緒に修行すること、私は大変励まされました。

私は、彼と私たち研修生の間に距離感を決して感じさせず、私たちといつも一緒に笑顔で接し助けとなり、励ましの言葉をかけてくれました。彼は私が困惑しているところへやって来て、会話をして励ましてくれることができました。彼はいつも洞察し、問題を軽くしてくれました。

私は彼にあなたが弟子を持ったとき、またはあなたの生活の中で不可能と感じた時、どのようにしたか聞いたことを覚えています。彼は「地獄に堕ちたときわかることが重要です」と答え、私を笑わせました。

すべての可睡齋の修行僧はとても親切に何度も何度も私たちを助けてくれました。役寮さんは意義ある滞在になるよう取りはからってください、講師の方々は智慧を分け合い、私たちの生活に違いができるよう時間を取り、遠くからやって来てくださいました。私は学んだことや教えを彼らの仏性と受け止め、無駄にならないよう祈っています。

1か月の最後に感想を聞かれ、スタッフと私たちの経験について話しました。私たちのやり方や、動きなどはとても違うため、日本の文化にとけ込むことはとても難しかったです。私はそれを判断するのではなく、ただ明らかに難しかったと言うことを伝えました。

別の視点では、1か月で間違ったことをしていることを批評することは難しいです。難しいけれども、その難しさは自分自身を見つめる機会にもなり、私自身の中でハッキリしていないことに慣れることでもあります。

可睡齋での短い滞在の間に種は蒔かれ、今でも根を張り続けています。ほとんど毎日、何かがおこって私の修行を補っていることを実感します。

特に、ルメー大岳師は、私たちがよくわからないことばかりでどんなに大変だったかにもかかわらず、忍耐強く接してくれて、いつも親切にしてくれたことに感謝します。

まだ書くことを続けることもできますが、ここで終わりにし、可睡齋での出来事は終わったと言うこと以外に何もありません。私は疲れ切り、膝はふくれあがり、痛みで落胆しました。

曹洞宗の僧堂での修行は、自覚すること、今あること、真実であることであった。私がそこにいることによって何かをしてくれたすべての方々や、すべての事柄にとっても感謝しています。

2006年伝道教師研修所の印象

ピエール・ジェラルド覚道

スイス・禅センター・オブ・ジュネーブ

私は常に初心者として、禅修行道場での完全な修行を経験することを望んでいました。しかし、日本の曹洞宗のお寺での経験は、私の望んでいた以上のものでした。

可睡齋専門道場は、大変有名な場所でした。有名な禅僧 西有穆山禅師もそこで修行しました。私は、ここで5週間修行することを許可してくれたすべての人たちに、感謝いたします。そして、いつも可睡齋の役寮、大衆の方々が私に向かって見せた順応性と寛容さに感謝します。彼らは私の本質的な欠点に対して、決していらいらしたり、怒ったりしませんでした。

研修所の最初から、私は長い時間座ることに苦労しました。特に、法要の間、食事や指導の間で、すべてが正座でおこなわれました。後になって、それが我慢できなくなると、私は坐蒲の上に座るのを許されました。しかし、それにもかかわらず私は度々集中力を阻止するような極端な痛みが、断続的に襲ってきたけれども耐えなければなりません。私はしばしばどこからともなくやって来る混乱した感じを受けました。これらの瞬間に、道元禅師のこの句がいつも心に浮かびました。『身体で理解すること(体得)』もし可睡齋のすべての役寮、大衆の理解がなかったなら、私は研修所を修了する希望を断念したでしょう。この相互の理解は、法要における連携や読経において、限りある肉体を超えた素晴らしいインスピレーションを感じることができました。

私たちがこの研修期間に教えられたすべての法要を、まったく同じ方法で修行する自信ができました。可睡齋の僧侶のように素晴らしく、そして同じようになるには時間を要しますが、どうにかしてこれを達成することは「行持報恩」かもしれません。それは、私が進歩するために大変必要なことです。私はこれらの法要の進退などを細かくメモをとり、家に帰るとすぐにこの研修の成果を活かすことができるように、すべてを記録にまとめ写本を作成することを決めました。

研修所では、研修生のために多くの講義の時間がありました。奥村正博講師と藤田一照講師の講義は、私に西洋化された禅、近視的な傾向、そして精神の過食症(多欲)などの危険性を気付かせてくれました。それらは、彼らの日本の修行経験にもとづいて指摘されたものでした。

また吉野真常後堂老師の印象的な講義によって、私は修行の意義を見つけることができました。吉野後堂老師は私に、修行することによって日々進歩している自分に自信を持つことを教

えてくれ、また吉野後堂老師の純粹で柔軟性があり、誠実な人柄や指導は私に勇気を与えてくれました。

鈴木文明維那老師は素晴らしい指導者で、私たちにパロディ方法で、自身の声を損なわないで經典をお唱えすることを教えてくれました。また、太鼓を叩くことについての彼の指導は、芸術と技術が融合したような素晴らしいものでした。私は試行錯誤を繰り返しながら、彼の指導を理解するまで何度も練習しました。

研修所での逸話から離れますが、この研修所の成果は何ですか？ それは、他の最も良いものと、自分自身の最も良いものがうまく融合することです。基本に立ち返り、これまで経験したことを改めて考え、お互いの良い部分を直接習得すること。可睡齋における5週間は、すばらしい講義や教えをおしげもなく提供してくれ『正伝の仏法』を体感することができました。

道元禪師の例にしたがって言えば、「空手にして還る」と言うことができるのでしょうか。私は、この研修所で僧堂の規矩や法式など多くのことを学び、記録し多くのものを持ち帰ります。しかし、道元禪師の言われる「空手」とはこのようなことではなく、本来無一物であるということです。したがって、私は空手にして還ります。

吉野後堂老師と鈴木維那老師の容易な言葉と、彼らの親切な指導は、私たち研修生に大変意義深いものでした。ルメー大岳師の好意。伊藤祐司師の熱心な指導。落ち込んでいた時に、それを取り扱う成澤廣仁師のユーモア。そして、兄弟のように歓待してくれた可睡齋の大衆をどうして忘れることができようか。決して忘れることはできません。彼らなしで、私の弱さを受け入れること、また他人の煩惱を取り払ってあげること、そして苦しみなくしてこの現実を受け入れることはできなかつたかもしれません。すべてに感謝を申し上げます。

坐禅参究帖(十八)

藤田一照

断想 27 坐禅と日常生活

私の坐禅観を一言でいうなら「無所得の正身端坐」ということになる。この二点を詳細に参究し解明していけば坐禅そのものについてはかなりのことをカバ-できるのではないかと思う。しかし、私にとっては、もう一つ非常に大切な参究課題が残っている。それは「坐禅と日常生活」という問題である。しかし、残念ながら紙数も残り少なくなったので、この問題についてはごく大雑把に論点だけをいくつか記すにとどめたい。その展開はまた別の機会にゆずりたい。

坐禅はあくまでも日常生活の端的な放棄である。普通の日常生活的行為を一切止めた非日常的な営みである。坐禅の価値はどこまでもこの非日常性に存するのだ。日常生活の真っ只中において、徹底的に非日常的な坐禅を継続的にすすめるからこそ坐禅が

我々の日常生活を根底から変革する力を持つのだ。坐禅と日常生活を統合するといってもそれは坐禅と日常生活の違いをあいまいにすることであってはならない。しかし、坐禅を日常生活という文脈から切り離してとらえることもまた間違いである。両者の違いと連関を見極めること。

水平的に流れる日常を、坐禅はその非日常性によって垂直的に裁断する。それは機械的に反復される習慣的パターンが一時抑止(《断想 20》)されることを意味する。無自覚・無意識のうちにとらえられ続け日常に「句読点」が打たれ、そこに始まりと終わりという明確なケジメ、節がつけられる。こうして生活のなかにリズムと自覚がもたらされる。坐禅によって拍子づけられる生活。

二十四時間という限られた時間の中に坐禅をする時間を入れるということは、必然的に何か他の活動時間を削ることになる。どうそれを塩梅するか、自分にとって本当に重要なことは何かを再検討することが迫られる。生活の再整理、簡素化。

坐禅においては、感覚や思考や感情などの生理・心理的現象に対して普段とは違った対応をする。それにはっきり気づいてはいるがそれをどうしようとはしないのだ。坐禅で培われるこうした態度は当然、坐禅以外の活動時にも発揮されるようになるだろう。無所得や正身端坐の工夫で養われるもの(「只管」という身心の構え)も日常生活の中に自ずと反映してくる。坐禅が日常生活にもたらす微妙な波及効果。

「坐禅を標準として朝から晩まで自己の態度を陶冶洗練し洗い清めて、限りのないわれわれの日常変化に対して自己の態度を坐禅に照らして反省する」(沢木興道老師)坐禅は日常を生きる態度を練成する一種の「型」「基本形」である。

自分が日常をどう生きているかは坐禅のなかにはっきりあらわれる。坐禅は日常生活という土壌に根をおろした木のようなものだ。大きなしっかりした木に育てるためにはその土壌である日常生活をきちんと確立する地道な努力が不可欠だ。それなしでは坐禅が生活からの逃避になってしまう。

日常生活のあらゆる出来事が坐禅をするかしないかという二者択一を迫ってくる。坐禅を延期したり中止したりする口実は身近に山ほどある。そういうなかで坐禅修行を継続するためには、人からの借り物でない自分の坐禅に対するヴィジョンを持っていなければならない。そういうヴィジョンをどう育てていくか。

《おわりに》

これまで、坐禅に対する私なりの参究を紹介させていただきました。参究したいテーマはまだ大分ありますが一応ここで締めくくことにします。読み返してみても、かなり強引で自分勝手なことを書いてしまったなどと反省しています。こういう機会を与えてくださった『法眼』に心から感謝いたします。坐禅に関心をもつ方々になにかの参考になったとすれば望外の喜びです。合掌